

県外の大会に参加した感想や審判会議等が出た話題、他のレフェリーの方々から伺った貴重な話などの中から、県内のレフェリーの皆さんにもお知らせしておきたいことを記録に残すことにしました。ご一読いただければ幸いです。 上村 英司



レフェリーレポート No. 1

2011. 3/6

1. 大会名: 第34回全国高等学校ハンドボール選抜大会九州地区予選大会
2. 期日: 平成23年2月3日(木)・4日(金)・5日(土)・6日(日)
3. 開催地: 熊本県山鹿市
4. 参加レフェリー: 宮崎 和彦&上村 英司

【大会概要】

- 2月の寒い中、山鹿市ということで雪道も覚悟して出発しましたが、幸い好天に恵まれ、用意していたチェーンを使わずに済みました。
- 今大会の審判団は23名[福岡4、長崎2、大分2、宮崎2、鹿児島2、沖縄2、熊本9]でした。このレベルの大会に9名のレフェリーを出せる開催県熊本の層の厚さを感じました。
- 今大会は全国選抜大会の予選大会です。全国への代表権(男子6チーム、女子5チーム)をかけて多くの接戦が繰り広げられ、全39試合のうち3点差以内のゲームが12試合という混戦ぶりでした。[1点差ゲーム6試合、2点差4試合、3点差2試合]

【審判会議】

審判会議は3日、山鹿市鹿央公民館で行われました。自己紹介の後、中地健三審判長から今大会のレフェリングをするにあたって、以下の6点について説明がありました。

1. 今大会にむけてのペアでの目標を持つ
2. 「平成22年度の審判員の目標」を再度熟読し、主旨を理解し、努力する
3. マンツーマンの際のコートレフェリーの位置取りについて
 - ・ゴールレフェリーに任せず、後ろに下がってもいいので広角に全体が見えるような位置(サイド側)に立つこと。マンツーマンの態勢を死角にしないこと。
4. チャージングとライン内防御について
 - ・コンビネーションよく判断し、タイミングよく笛を吹くこと。決して「逃げのライン内」を取らないように。
5. ミス(反則)でのゴールインを認めるな！
 - ・オーバーステップやラインクロス(着地)でのゴールインを認めないこと。ファウルがあれば、戻してフリースローか7mスロー(+罰則)を。
6. 一日ごとのペアの反省を

また今大会では、浦川寿生&石崎章弘ペア(長崎)と福島亮一審判員(熊本)の特別講演を聞く機会に恵まれました。浦川&石崎ペアは3日の審判会議の中で、福島さんは5日の宿舎でのミーティングで話していただきました。

【特別講演】『めざせ！日本リーグレフェリー ～トップレフェリーから学ぶ～』

◆◆◆浦川&石崎ペアの話◆◆◆

浦川さんと石崎さんはペアを組んで20年になります。日本リーグや国内の主要大会で数多くの試合を担当してきました。今回の講演では、昨年参加した全日本総合選手権大会の感想を交えながら、審判員として大切にすべき事について話していただきました。

- ゲーム前から「2人で何をやっていくのか。」を話す。
- クリーンなハンドボールを目指す。
- コートレフェリーからゴールレフェリーに変わる時、ボールやプレーヤーから目を離さない。慌てない。移動の際はお腹を必ずコートに向けておくようにする。これは訓練によってできることである。
- チーム役員の声が、選手に向けられているものなのか、それともレフェリーに向けられているのかを聞き分ける。もしレフェリーに対しての声ならば、アクションを起こす必要があるのではないか？視線を合わせることを避けると対立してしまい、ゲームのコントロールができなくなることがある。
- 正しいスローをさせる。例:クイックスタートではポイントで止まる意思があるかをよく見極める。
- 一本目のクイックスタートを、ていねいにさばいて欲しい。一つ目を流すと、二つ目のやり直しをベンチは受け入れない。
- アウト割りでのオーバーステップ、サイドシュートでの着地等、ていねいに見る。
- ポストとディフェンスの攻防やカットインプレーを正しく評価する。特にディフェンスの正当な防御を評価する。ポストの押し込みに7mスローの判定をしないように。また、ポストの瞬間的なブロッキングは、足元を見ると容易に判断できる。
- ハンドボールはアドバンテージのある競技。選手が一番いい所を引き出すために適用する。ただし、どこまでプレーさせるかについては、はっきりとした境界線をひく。アドバンテージを見ることで、重大な反則に対して罰則を与えることを忘れてはならない。

お二人の話に一貫して感じられたのは、「何事も基本が一番」ということです。大会では実際のレフェリングを観察させていただきましたが、一番関心させられたのは、二人とも基本にとっても忠実であるという点でした。位置取り、ジェスチャー、走り方などの基本動作を一つひとつ正確に行なうことが、結果としてチームや観客に安心感を与えているのだと思いました。

◆◆◆福島審判員の話◆◆◆

福島さんは日本のトップレフェリーの一人で、全日本総合選手権では男子決勝戦を担当しました。また国際審判員として海外でも多くの試合を経験しています。ここまで書くと、まるで「雲の上の人」のような印象を与えてしまうかも知れませんが、実際はとても気さくな方で、私たちにも気軽に話しかけてくれます。世界のハンドボール界の情勢を分かりやすく紹介してくれるので、福島さんの話を聞いていると世界をととても身近に感じることができます。今回は『強いチームには、いいレフェリーが存在する』というテーマで、配布されたレジュメに添って話していただきました。

1. なぜレフェリーをしているのか？

福島さんは笛を持って20年になります。はじめはプレーヤーでしたが、怪我でプレーができなくなった時にレフェリーを勧められたのがきっかけだそうです。最近、『世界の中で日本が強くなって欲しい。日本の中では九州のチームに強くなってほしい。』という強い思いを持ってレフェリーをしています。

2. 世界選手権の強豪国には、世界のトップレフェリーが存在する

次に、福島さんはとても興味深い資料を提示してくれました。2011年世界選手権大会の上位チームは、

優勝:フランス	2位:デンマーク	3位:スペイン	4位:スウェーデン
5位:クロアチア	6位:アイスランド	7位:ハンガリー	

でしたが、この大会のレフェリー12ペアは、すべてこの上位7ヶ国から派遣されていました。この事実は『強い国には、いいレフェリーがいる』というIHFの考え方を裏付けるものとなっています。

3. 地元にトップレフェリーがいること

2で述べられたことが単なる偶然ではない根拠として、以下の理由が挙げられました。

《地元でトップレフェリーがいると…》

◎世界の情報、国内の情報が入手しやすい。

◎次世代のレフェリーを育成しやすい。

◎ゲームメイクに大変役立つ。

※レフェリーのゲームメイクをチームが知ることで戦術に役立つ

(罰則の基準、パッシングの基準、ステップの基準、試合序盤・終盤のゲームメイクの仕方、など)

ただし、次の大切な条件を満たしていなければ、せっかくの利点を十分に生かすことが難しくなります。

◎国、地域がレフェリーの存在を認めていること。

◎トップレフェリーの育成、立場の保障を、国・地域の協会が保障している。

4. レフェリーの登録者数が、激減している

これまでのお話で、レフェリーは単なる試合の審判員だけでなく、所属している国や地域のチーム力向上に大きく関わっているということが分かりました。しかしそれだけに、レフェリーの登録者数が激減しているという状況は、決して見過ごせない問題です。

現在、国内のレフェリー登録者は約2500人で、そのうちの大半を40代が占めています。20代後半から30代前半のレフェリーが少なく、5年後には、今のトップレフェリーはほとんどいなくなってしまうそうです。(ちなみに世界選手権のレフェリーの平均年齢は36歳、最年少は26歳でした。)ハンドボールの普及や発展を願う気持ちは皆同じですが、その想いと逆行するように『レフェリー離れ』が進んでいます。

福島さんは、その原因として以下の点を挙げていました。

◎レフェリーを誰が守る

レフェリーは1日や2日でできるものではなく、長時間かけて育てるもの。やっと仕事や家庭の都合をつけて審判に来て、非難やクレームにさらされてばかりでは、レフェリーを続ける気持ちを保つのは難しい。

◎上級審判審査での不合格

研修、指導が十分にできていないまま受験している、させている。ペーパーでの不合格者が多いのは準備が足りない証拠。

◎勤務状況の変化

ブロック以上の大会は開催期間が3日以上あり、少なくとも1日は平日の勤務にかかることが多い。不況の影響や職場の理解不足などの原因から、審判に行きづらくなっている。

5. おわりに

福島さんは最後に以下の2点を強調して講演を締めくくりました。私たちも、このことを念頭に置いて審判活動に打ち込みたいと感じました。

- ◎選手強化とレフェリー強化は両輪でなければならない
- ◎九州から、全国のトップレフェリーが常時指名されることを願って

【大会のまとめ、感想】

●今大会に参加するにあたって、ペアの宮崎先生と次の目標を立てて試合に臨みました。

- ①身体接触に関する判定基準を明確にし、大会を通して一定の基準を保つ。
- ②勝負どころを7人对7人で戦えるよう、判定基準をしっかりとチームに伝える。
- ③試合中、『ペアがどこで何をしているか』を常に頭に置いておく。これができていれば、合図をしなくても左右のポジションチェンジはスムーズにできるはず。

●他のペアをウォッチして、参考になることがたくさんありました。特にすぐにも実践しようと思ったのが、沖縄ペアの『ターンオーバー時の追いかけ方』です。ゴールレフェリーからコートレフェリーに変わる際、早く定位置に着くことを考えて直線的に走っていましたが、沖縄の2人はプレーを一番良く観察できる位置を探りながら追いかけるので、定位置に着くまでの軌跡はジグザグの形になっていました。速攻は大きな得点チャンスであると同時に、退場以上の重大なファールが起りやすい場面でもあります。身体接触をできるだけ説得力のある位置で観察できるよう、このコース取りを試してみようと思いました。

●試合後の反省会で、浦川&石崎ペアから「もっと自分たちと一緒に試合を観たり、互いのレフェリングを観察し合ったりして、意見を交換して欲しい。」とのご意見をいただきました。裏を返せば、そうするレフェリーが少なく残念である、ということです。トップレベルのレフェリーに自分の拙いレフェリングを見て欲しいとお願いするのは、正直気後れするものですが、滅多にないレベルアップのチャンスでもあります。これからは迷惑を承知で頼んでみよう、と決意を新たにしました。

●福島さんの講演の中で、『笛で甘やかしてはいけない』という言葉が印象に残りました。大分県でも、九州大会や全国大会から帰ってきたチームから、県内では反則に取られないプレーを取られた、という話やその逆の話を聞くことがあります。県内と県外とでルール解釈や罰則の適応などに差があると、上位の大会で戸惑うことが多くなり本来の力を出せなくなります。大分のチームに不利益が出ないために私たちレフェリーができることは、上位の大会で得た経験や情報を、できるだけ多くの県内審判員やチーム関係者と共有することだと思います。大分のチームが強くなるのが、大分の審判にとっても自信につながるような関係を築きたいものです。

【おわりに】

今回の大会は、審判のスキルアップというよりは、レフェリーとしてどのようにハンドボールに関わっていくのかを考える良い機会になりました。講演の後、宮崎先生と「こういういい話は他の審判の人たちにも聞いてもらいたいなあ。」と話し合ったのが、このレフェリーレポートを出すきっかけとなりました。これからも県外の大会に参加する機会があれば、報告していきたいと思います。今回は気合が入りすぎて長い文章になってしまいましたが、これでは作る方も読む方も疲れてしまうので、次回はいっとシンプルに、写真とかも入れながら、気楽に作ってみようと思っています。